

令和 6 年 2 月 20 日

教 育 長 様

研究コース	
A グループ研究 A	
校園コード（代表者校園の市費コード）	
732665	
選定番号	142

代表者	校園名 :	大阪市立墨江丘中学校
	校園長名 :	林 憲治郎
	電話 :	06-6674-3612
	事務職員名 :	尾上 紗香
申請者	校園名 :	大阪市立墨江丘中学校
	職名・名前 :	主務教諭・尾松 大義
	電話 :	06-6674-3612

令和5年度 「がんばる先生支援」研究支援 報告書

◇令和5年度「がんばる先生支援」研究支援について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	A グループ研究 A	研究年数	新規研究（1年目）
2	研究テーマ		人間関係形成力育成プログラムの開発		
3	研究目的		今日、少子化、核家族化、情報化等が急激に進み、生徒を取り巻く環境は大きく変化している。家庭や地域社会において、人の関わり方を身に付ける機会や直接の体験を通して学ぶ生活体験、自然体験の機会が減少している。このことは、集団の中で人間関係をうまく築くことができない生徒を生み、いじめや不登校等さまざまな問題を引き起こす一因となっていると言われている。さらに集団内のの人間関係の希薄さや未熟さによる自己肯定感やコミュニケーション能力の低下が指摘されている。本校は過去3年間仲間づくりの活動を各学年で取り組んできたが、系統だったものになっておらず、探究学習がもたらす本来の結果を生むことができていなかった。そこで今回の研究を通して1年生から3年間を見据えた系統だったプログラムの分析・開発を行う。日々の様々な場面において、人間関係調整力を直接的に育成するための手立ては非常に有効である。様々な集団活動を通して相互にかかわり合い、具体的な課題に取り組む中でよりよい人間関係を構築していく営みを体験することで、実感として人間関係調整力を獲得することを通して育成を図ることをねらいとする。		
4	取り組んだ研究内容		いつ、何のために、どのようなことを実施したのかを具体的に記載してください。 (MSエッセイ 9.5pt イント) 夏休み明けに不登校生の数が増えることが例年あったため、夏休みに1年生教員対象のプロジェクトアドベンチャー研修を行った。目的としては、新学期になり学級目標立案に向け、本音で意見が言い合える雰囲気を作る。活動に取り組み、級友との親睦を深め、コミュニケーション能力の育成を図ることがメインであった。コロナ禍でコミュニケーション不足になり、人間関係形成において問題が生じていたため、コミュニケーションを促進する「レクリエーションパート」、チームで協力し課題を解決するアクティビティ展開でチームパフォーマンスを上げる体験を行う「チームビルディングパート」の2部構成で展開した。研修後の課題があり、コミュニケーションを深めるために必要な要素が不足しており、対話スキルの習得が事前に不可欠であると感じた。 2学期に入り、他人との望ましい関わりの大切さについて、生徒の自覚を深めることを目的として、コミュニケーションスキルに関わる研修【ファシリテーター研修・アサーティブコミュニケーション研修】を実施した。他者との関わり方の基本的な3パターンについて教員同士のロールプレイを見て、振り返りを行った。 相手との関係の3つのパターンである「遠慮型」「自己中心型」「アサーティブ型」の説明を受け、中学生では色々な場面で「アサーティブ型」の対応ができるような力を身に付けて欲しいと教授頂いた。「遠慮型」は良さそうに見えるが、誰も良いことにならないことがわかり、誰もが傷つかず、上手に人と関わるには、「アサーティブ型」になるようにすれば良いことがわかった。この研修後、学年の授業やその他様々な行事や活動において、対話を通したグループ活動を中心に行っていたが、問題が生じた時に相手を否定せず、対話を通してグループの意見・考えを発表することができるようになった。 最後に、2学期以降に総合的な活動の時間を中心に探究学習を行ったが、チームビルディングやコミュニケーションスキルを磨いた土台があったため、各班で設定した課題を仮設→検証→考察→検証→結果といったP D C Aサイクルで自分たちオリジナルの答えが出せるようになった。 現場視察で行った東京の安田学園では中学校における探究学習のカリキュラムマネジメントを学んだ。探究学習と聞けば特別な学習が必要と思われるかもしれないが、教科横断の発想を持ち教材研修すれば良いことがわかった。探究学習で比較的取り組みやすいもので、自然（動物）を探求する「自然科学探究」、地域の課題を見発見・課題する話し合いを実践する「地域探究」がある。この2つを扱い3年間見通しを立てたカリキュラムデザインをすれば系統だった探究学習が行えることがわかった。来年度はこの視察で得たことをベースに「墨江丘スタイル」の探究カリキュラムを作っていくたい。		

5	研究発表等の日程・場所・参加者数	研究発表等を実施した日・場所・参加者数を記載してください。						
		日程	令和 6 年 2 月 19 日	参加者数	約 30 名			
		場所	大阪市立墨江丘中学校					
		備考						
大阪市教育振興基本計画に示されている、子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上および教員の資質や指導力の向上について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それらからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。								
<p>【見込まれる成果 1】</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 <input checked="" type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>大阪市立墨江丘中学校教職員授業力向上を行う。 授業の在り方研究研修、伝達研修を行い生徒の感情にアプローチしたコーチング等を用いた授業展開の研究を行う。</p> <p>『検証方法』</p> <p>学校アンケートより、保護者・生徒アンケートの分かりやすい授業の評価ポイントを昨年度より（生徒アンケート）平均2ポイント以上向上する。（学校アンケート）</p>								
<p>〔検証結果と考察〕</p> <p>生徒の評価は、昨年に比べて上がったが、「わかりにくい」と感じる生徒もあり、その生徒への手立ても含め、継続して授業改善に努めていく必要がある。今後もこれまで同様、わかりやすい授業を目指し、授業改善の取り組みを進めていく。また学習の意義や必要性等についても生徒たちに考える機械を作っていく。この研究を通して生徒の気持ちを引き出しコミュニケーションスキルを学んだが、それに加え個別最適化な学習教材を提供することが生徒の学力向上、さらに学習意欲向上に繋がるとわかったので、次年度は生徒それぞれに合った教材を提供できるようにする。</p>								
<p>【見込まれる成果 2】</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 <input checked="" type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>探究学習を通して、友達と協力して学習や活動に取り組むことで、人間関係形成能力の必要性に気づく。</p> <p>『検証方法』</p> <p>プログラム実施前後のアンケートより、子どもの学びに関する項目設定を行い、意見の違う人とも、わかり合えるまで話し合う必要があるという肯定的回答を85%以上肯定的回答を目指す。</p>								
6	成果・課題	<p>〔検証結果と考察〕</p> <p>年間を通り、各授業でペア、グループで対話をする活動を多く行ったこともあり、対話の必要性をポジティブに捉えている生徒は9割を超えた。学校教育において、教える者・教わる者・評価する者・評価される者という教師・生徒の二項対立的な枠組みの中で、子どもたちが、常に教師から教わる者、援助や保護を必要とする者として位置づけられている現状がある。この関係性と関連し、授業内で話すという活動の多くは、教師が担い、生徒は教師の話を受信する聞き手として多くの位置づけられていると言える。教師と比べて、子どもたちが授業の中で話をする機会が極端に限られている現状に対して、子どもたちが好意的に話をする機会を、授業内にどのように作っていけるかが、重要課題と言える。</p>						
		<p>【見込まれる成果 3】</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 <input checked="" type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>探究学習を通して、友達が話すことを、聞くことの大切さを知ることによって人間関係形成能力が身に付く。</p> <p>『検証方法』</p> <p>研究発表会において普段の授業の在り方を見直すきっかけとなったという質問紙アンケートにより、85%以上の教職員について改善するきっかけとなったという肯定的回答を目指す。</p>						
		<p>〔検証結果と考察〕</p> <p>ファシリテーター研修を通して授業内における教師の役割を再確認し、従来の授業を見直し、より多くの言語活動を生徒に体験させなければならないという意識が芽生えた。「判りやすい授業の展開」を求める教員は100%だった。「言語活動の充実」は何か特別な学習をしなければいけないと思われるがちだが、日々の授業の充実、「一人ひとりが思考し、判断し、表現する授業」であるかどうかでしかない。その視点で授業展開を考えると、「言語活動の充実」を図るためにには、子どもたちが本気で学習に取り組む授業づくりを行いうどう、ごく当たり前のことを実践するだけである。「学び」の主体は子どもにある。その子どもが授業で輝く具体的な姿を求めれば、おのずと「言語活動」が入り込んでくる。主体的に学ぶ子どもの姿を求めて、教師は何をすべきなのか。どのように単元を構想し、授業を構成するのか。そして子どもたちとどう向き合っていくのかを考える必要がある。</p>						

6 成果・課題	<p>【見込まれる成果4】</p> <ul style="list-style-type: none"> <input checked="" type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 <input checked="" type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上 <p>対話力・コミュニケーション能力の向上 生徒の興味関心を高め、ICT機器の操作能力の向上を行う。</p> <p>『検証方法』 プログラム実施前後のアンケートより、子どものICT機器使用に関する項目設定を行い、グループで活動したり話し合ったりするときなどにタブレットを使うことは、友達のいろいろな考えを知り、学習を深めることに役立ったという肯定的回答を85%以上肯定的回答を目指す。</p> <p>〔検証結果と考察〕 9割を越える生徒が使用に関して肯定的な回答をした。新しい学びの形を積極的に取り入れることで、子どもたちが自身の学習を進める意欲を持ち、互いに思いを伝え学び合える関係を作ることを意図していることはもちろんあるが、そうした意欲や関係作りを進める過程において、ICT機器を活用しない授業の場合と同様に、子どもたちの学習への、あるいは他者や自己への意識に目を向けることは重要である。個別、協働といった学習の類型やICT環境の方が先に立つのではなく、学級の中で学ぶ子どもたちを連続的に見ていく視点を持ち、個々の子どもや学級の実態、その育ちに関する教師の願い・見通し等に即して有効な学習活動を実践することが重要である。</p>
	<p>【研究全体を通した成果と課題】 研究発表会等で使用した資料や研究冊子から引用し、端的に記述してください。</p> <p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する 中学校学習指導要領第2章第4節理科には「自然の事物・現象に進んでかかわり、目的意識をもって観察、実験などを行い、科学的に探究する能力の基礎と態度を育てるとともに自然の事物・現象についての理解を深め、科学的な見方や考え方を養う」と書かれている。このように新学習指導要領でも「探究」の重要性が書かれている。生徒を抑えつけ、静かに座って授業を受けさせるよりも、いかに生徒の学習意欲に火をつけ、積極性をもって授業に参加させることができると考えている。また、中学校学習指導要領第1章総則第4では「各教科等の指導に当たっては、生徒の思考力、判断力、表現力をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識および技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、生徒の言語活動を充実すること。」と書かれている。このように「全教科での言語活動の充実」が挙げられている。これは1つの教科だけでは対応できないので、全教科の先生の取り組みが必要となってくる。今後も探究学習を通して、講義形式の一方通行である教師主体の授業ではなく、生徒自らが探究する生徒主体の授業を目指していきたい。</p> <p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>3. 継続研究（3年目）</p> <p>『代表校園長の総評』</p> <p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する 生成AIの進化、ロボット、機械化の加速化が進む社会変化の中、今までの既存の教育の在り方では、社会と学校とが繋がらない場面が多くなってきていている。そんな中、探究のテーマの中、子どもたちが社会の課題に対してどのように向き合って行くかのトレーニングを行い、紙を見てのプレゼンは本校では無く、事前の準備と自分の言葉で発表する習慣を確立することができた。社会の中での発言する突破力と課題と共に乗り越える人間関係形成能力の向上は不可欠なものとなっている。さらに研究を深め、大阪市の教育に一石を投じる仕組み作りを2年目以降さらに期待し進めていってもらいたい。</p> <p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>3. 継続研究（3年目）</p>